

「互いに文句を言い合うのはやめなさい」

ヤコブ5：9

堀田修一 21・7・11

I 「互いに文句を言い合うのはやめなさい」：9。

私たちは、困難や耐え忍ぶことが長くなると、文句を言い合い易くなる。本当にそうである。私もである。そのことが戒められている。つぶやく時間があるなら、その代わりに、すべてを見、知り、支配しておられる神に愛と信仰を持って祈りたい。「いつでも祈るべきであり、失望してはならない」(ルカ18：1)。※ある人の証し：辛い事の多い中で「私は、くれない族になっていました。こんなに苦労しているのに、ねぎらってくれない、わかってくれない。自信を失くし、置かれた場から出ようと思いつめた私に、ある方が、神が「置かれた所で咲きなさい」と言葉を下さった。その方は神に変えられた。置かれた場に不平不満を持ち、他人の出方で幸せになったり、不幸せになつては、環境の奴隷でしかない。また、試練の中でも、与えられている主の恵みを数え感謝したい。「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」(Ⅱコリ12：9)。「主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな」(詩103：2)。つぶやく前に、主にあるお互い、神の恵みとお互いに神が与えられている良い所を見(7月6日のみことばの光の箇所「ユダにも良いことがあったのである」Ⅱ歴代12：12。欠けだらけの神の民と私達の良い所を見て下さる)、互いに励まし感謝したい。「むしろ、感謝しなさい」(エペソ5：4)。

Ⅱ 「さばかれることがないように」：9

- ① 文句を言い、つぶやき、人をさばく人は、自分もさばかれる。いつも人に批判的で、人のあら捜しをする人は、自分にも批判を招き寄せる。人の心は離れて行く。人は、自分のことも他の所で悪く言われると気づくからである。悪口の交わりは、真の信頼関係を生み出す事ができない。いつも人を批判しているタイプの人には、自分に加えられる批判には敏感である。自分が批判を受けると、すぐにつぶやき、文句を言い、やり返す。傷ついたと言いつらす。しかし、自分が人を批判している場合には、人が傷つく事を少しも心に留めているようには見えない。しかし、いつも人を批判している人は、いつか批判し返される。神が神の時に正しくさばかれる。
 - ② 文句を言い、人を批判し、人をさばく人は、すべてを見、聞き、知っておられる神に必ずさばかれる。厳粛な事実がある。
1. 私たちは、うわさや悪口や片方からの情報だけで、ある人を悪いと決めつけ、悪く言う事を控えなければならない。すべてを見、知り、正しく判断されるのは神である。「あなたがたは、主が来られるまで、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れ

た事も明るみに出し、心の中のはかりごと明らかにされます」(Ⅰコリ4:5)。私たちは、父なる神が自分を見ていて下さる事を、常に心に留めるべきである。「心に満ちていることを口が話すのです…人はその口にするあらゆるむだなことば(悪口、つぶやき、批判等)について、さばきの日には言い開きをしなければなりません」(マタ12:34、36)。私たちは、御父の御目のもとに主の初臨(クリスマス)と主の再臨(救いの完成とさばきの日)の間を歩んでいる旅人。「地上では旅人であり、寄留者である」(ヘブル11:13)事を自覚して歩みたい。

2. 「さばいてはいけません。さばかれないためです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです」(マタイ7:1,2)。人を厳しく批判している人は、その同じ量り、基準で厳しく神にさばかれる。神によってこれまで、数えきれない罪を赦された私たちへの御言葉→「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい」(エペソ4:32)。「私がおまえをあわれんでやったように、おまえも自分の仲間をあわれんでやるべきではなかったのか」(マタイ18:33)。「なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の梁(大木のような罪、欠点)には気づかないのですか。…偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい」マタイ7:3,5。私たちの目は、外に向いているので、人の目の中のちり(欠点、罪)が見え易く、非難するが、自分の姿、心の中の上から目線の高ぶり、さばき、恨み、ねたみの罪には気づかない、悔い改めようとしなさい。自分の事を棚に上げて、人の事を悪く言い、非難するのではなく、まず自分自身がすべてを見抜いておられる神の前に出て自分自身の罪を告白し悔い改めたい。そのようにして神の大きな愛と赦しを受ける時、人に対して心の優しい人に変えられ続ける。

3. 私たちが①物事を正しく判断する事と②人をさばく、非難する罪との違いは?※さばくの原語:判別、識別する、判断する。→その動機と目的が大切である。聖書が禁じている、人をさばく、あら捜しする、文句を言う、非難する罪は、その目的が、物事を解決する、人を回復させる事ではなく、その人自身を攻撃する、物事の判断ではなく、人格を否定する、その人を倒す事である。私たちは、その人の人格、その人自身を愛する事とその人の行動の誤りを愛を持って正す事を区別できるように心から祈り主に拠り頼みたい。意見が違ってても互いに愛し合う事ができる。主にあって。柔和な心で、当の本人に過ちを正す事は、さばく事ではなく、真実な愛である。ガラテヤ6:1。主にあるお互いが愛をもって真実に向き合い語り合う事は、成長をもたらす。他の人に悪く言いふらすことが主にある交わりを壊す罪である。人間関係の相談と人をさばく事は違う。

Ⅲ「見なさい。さばきを行う方が、戸口のところに立っておられます」:9

クリスマスに来られた(初臨)主は、もう一度来られる(再臨)。救いの完成とすべてを正しくさばくために来られる。再臨する為に戸口の所に立っておられる。この2千年間、一日一日来るべき主の足音は近づいている(その時がいつかは人間にはわからないが)。最後にその主が霊的なドアをノックされる時、私たちは開ける準備をしていなければならない。「なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばき

の座に立つようになるのです。…私たちは、おのこの自分のことを（あの人はあんな事をしましたよではなく、自分はどうかであったかを）神の前に申し開きすることになります」ローマ 14：10、12。自分自身が、今日まで、数えきれない罪を神に赦されて来た恵みを、いつも忘れないようにしたい。「主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は あなたのすべての咎（罪）を赦し（主が良くして下さった恵みで最初に出て来るのは主の赦し）（詩篇103：2, 3）。主の愛を受け続けている恵みを思い、人を非難するのではなく、まず自分の罪を悔い改め、互いに愛し合い、赦し合いながら再臨の主の到来を待ちたい。「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。主イエスの恵みが、すべての者とともにあるように。アーメン。」黙示録22：20, 21。感謝も忘れ、文句を言い合っているなら、本音で、「主イエスよ、来て下さい」と祈る事は出来ない。主の初臨と再臨の間に主によって生かされている事を覚えつつ過ごしたい。「万物の終わり（主の再臨）が近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい」Iペテ4：7, 8。コロナ禍の試練の中、コロナ終息の為に祈り、神と深く交わり、互いに文句を言い合う事を止め、主の数えきれない恵みを数え神と互いに感謝し合い、互いに愛し合い、支え合い、再臨の主を待ちましょう。